

大物論¹

原作: ジョアキン・マリア・マシャード・デ・アシス(1839 年～1908 年)

和訳: Ana Maria Sigas Pichini

Clície Santos de Araujo

João Paulo Fedele de Azeredo

Maria Luísa Vanik Pinto

Tomoko Kimura Gaudioso

—眠いか？

—いいえ。

—俺も眠くない。ちょっと話がある。窓を開けてくれ。おい、今何時だ？

—11時です。

—これで夕食に招いた最後の客が帰った。これで悪戯坊主のお前も二十一歳だ。二十一年前、1854年8月5日にちっちゃなお前が生まれた。今はりっぱな男になって、長い鼻髭をして、恋も何回かして…

—お父さん…

—甘えるな。まじめに友達どうしとして話そうじゃないか。ドアを閉めなさい。お前に大事な話がある。まあ、座って話そう。二十一歳になったし、株もいくらかあるし、大学も卒業した。政治家や、裁判官や、新聞記者や、農業の実業家や、事業家や、文人にもなれるぞ。お前の前にはいろいろな道が開いている。息子よ、二十一歳になるということは我々の人生の第一歩でしかない。ウィリアム・ピットとナポレオンは若くて老成でも、二十一歳の時ではなかった。しかし、どのような道をえらんでも、私の期待は、お前が大きくなり有名になるか、せめて顔が知られ、普通の人より上になることだ。人生は、ジョンジョンよ、大きな宝くじだ。賞金はなくても、不運はたくさん転がっている。前の世代の溜息が次の世代の希望を潰すんだ。それが人生と言うものだ。泣いても、笑っても、どうしようもない、良いことも、悪いことも、全部受け入れて、前向きに生きて行くしかないのだ。

—はい、分かりました。

—しかし、年を取った時のために米を取っておくのがいいのと同じように、何か仕事に失敗した時や、報酬が思ったより少ない時のために、ある一つの職業を身に着けたほうがいいと言うことを政治家になったお前に言いたいのだ。

—それはありがとうございます。しかし、それはどんな職業でしょうか。

—大物より適当でよい職業はないと思う。大物になるのは私の若い時の夢だった。しかし、父親の指示がたりなかったため、見てのとおりお前に夢を託すほかに慰めもモラルもない。愛しい我が息子よ、どうか私の話を聞いて、分かってくれ。お前は若くて情熱があり、瑞々しくて、年のせいかできているところがある。それはいいだろう。しかし、45さいになったら、落ち着いてまじめそうな顔になるために努力をなさい。「まじめさは姿の不思議」と言った賢者のことばは「大物」の態度をよくあらわしている。あの心から来るまじめさと、形は似ているが違う、反射というこのまじめさを混同してはならない。私が言っているのは形だ。形だけのことだ。それが自然な生き方だ。45さいと言う歳は…

—そうですね、なぜ45さいなのですか。

¹ タイトル: Teoria do Medalhão

—考えても分かるとおり、ただ単に45さいと決めたのではない。普通、その歳にその現象が起こるのだ。ふつう、ほんとうの大物は45さいから50さいの間に頭角を表すが、たまに55歳から60歳の間に頭角を現すやつもいる。でも、それはめずらしい。そのほか、40さいとか、もっと早く、35歳とか、30歳のやつもいるが、それも多くない。25歳と言う歳は言うまでもない。このような早生なやつは天才の特権を待っている。

—なるほど。

—私が言いたいことはこれだ：何か仕事を始めたら、自分にたいしても、他人にたいしても、考えることによく気をつけなければならない。何も考えがないのが一番いい。例えば、腕が一つしか使えない俳優を想像すると分かる。工夫をして、観客の目から欠陥を隠すこともできるが、腕は二つあればもっといい。人の考えも同じだ。死ぬまで強制的に隠すこともできる。しかし、それも普通にはできない。一生ずっと隠す努力をすることも適しない。

—でも誰が僕を・・・

—息子よ、たしかお前の頭の中はまったくの空のはずだから、この尊い仕事をするのに適している。街角で聞いた意見をそのまま家の中で繰り返したり、その反対を話すことを言っているのではない。なぜならそれも自分の意見がないと言うものの、それでも記憶力に裏切られるかも知れないからだ。いや、きちんとまじめにチョッキの形や、帽子の大きさや、新しい長靴の軋む音などの好みを述べることを言っているのだ。お前には能弁家のきざしがあるので、そこに希望があるのだ。しかし、歳を取ると、自分の考えが出て来ることがあるため、それを防ぐために心を鍛えなければならない。自分の考えは思いがけなく口から出て来るものだ。抑えようとしても、出てきて早とちりをしてしまう。それをきいた敏感な一般人はかならず本当の大物と偽の大物を見分けるのだ。

—私もそう思います。しかし、それは仕方がないでしょう。

—いや、仕方がある。つまらない仕事をし、レトリックをたくさん読んだり、あるいは人の話を聞いたりすることだな。ランプや、ドミノゲームや、ホイストは強化済みの薬だ。ホイストは沈黙に慣れるという、他にはない利点がある。それは慎重さだ。頭は休まっても、水泳とか、馬術とか、新体操とは同じじゃない。だからこそ頭を休ませて、なくした思考力を取り戻す。ビリヤードは最高だ。

—なぜですか。あれも体を動かすでしょう。

—それはそうだが、実際と理論は違う。ビリヤードを例外として、すすめるのは精密な統計によると、4分の3のビリヤードプレーヤーは同じキューについてみんなといろいろな意見を交換できる。

—一人でいると余計なことを考えるから、誰かと散歩するのがいい。特に散歩楽しんだり、立ち止まって、無駄話をしたりするのがよい。考えと言うものは大勢の中でも独りでいると余計なことを考える。

—でも、もし僕と一緒にしてくれる手頃な友達がいなかったらどうするんですか。

—構わない。広場にいる暇人たちと交わるという手段がある。そうすれば独りぼっちという陰が消えてなくなる。本屋はその雰囲気のかいとか何かほかのかよく分からないが、私たちの目的には適当じゃない。それにもかかわらず、時々店に入るのはとても有利だ。それもこそそこそではなく、どうどうとみんなに目立つようにな。簡単に問題は解決できる。そこでマザデの素晴らしいエッセイの読者とはっきり話すのでなければ、毎日の噂話や、その週の面白いできごとや、密輸や、悪口

や、ハーレー彗星のことなど何でも話せばよい。紳士の75%は同じ意見を繰り返すだろう。そのような平凡な話はとても健全だ。そう言うことを8ヵ月、10ヵ月、18ヵ月、もしくは2年間続けること、どんなに頭がよくても、そのうち知能が下がり、まじめになり、規律を守るようになり、平凡になる。言葉については、知能とかんけいがあるので、何も言わない。言葉は簡単で、ちょびっとほんの少し、色もなく、音もなく…

—それは地獄だ！時々話し方を飾れないのは…

—それは大丈夫。表現の豊かな言葉を使うがいい。例えばレルナのヒドラや、メドゥサの頭や、ダナイドスの桶や、イカロスのつばさなど、ロマン派や、古典派や、現代派の作家が必要なときスタイルをくずさないために使う言葉だ。ラテン語の文や、歴史上の名文や、有名な詩や、法令や、格言などデザートのときや、お礼のときや感謝の辞令のスピーチにちょうどいい。「Caveant, consules, consulsゆだんするな」は政治関係の文章を終わらせるのにちょうどいい。「Si vis pacem para bellum、汝平和を欲さば戦へのそなえをせよ」も同じだ。人によると引用文のスタイルを新しく美しく言い換えるやつがいるがそれはやめたほうがいい。引用文の古い美しさを汚すことになる。それよりもずっといいのは個人の記憶や社会の記憶に固定されているキャッチフレーズや決まり文句などだ。それは聞く人が無駄な動力をしなくてもすむという利点がある。今ではないが、あとでぜんぶ書いておく。あとは、この仕事が考えたことを考えると言う難しい芸を教えてください。

このシステムの利用は仮説を作ればよいということだ。例えば、法律をつくって、履行してもそれが効果をなさなくて悪がそのまま残るとする。その問題は暇人の興味を引いたり、無駄な調査やめんどろな書類や資料の収集をしたり、その可能性のある原因やはっきりした原因やそうかもしれない原因など検討したり、心を入れかえた人間のかきりない可能性や悪の性質や薬の取り扱い方と使用の事情など検討したり、すなわち、いろいろな段階の話や概念や妄想など、たくさんネタはある。みんなにこんなようなごちゃごちゃした話をするのではない。ただ「法律より風習に習おう！」と言えればいい。この短くて、透明で、汚れない常識的な言葉は急に雲の間から太陽の光がさすように心にささり、もんだいをすぐ解決する。

—それでお父さんはモダン化の利用に反対なのでですね。

—説明しよう。その利用には反対するが語いは尊ぶ。新しい科学用語も同じことが言える。これを暗記しなければならない。大物の特徴はテルミノス神のようなもので、科学は人間のやることで、最後には大物にならなければならないから、自分の時代の武器を使うにこしたことはない。二つに一つ「これらの言葉は30年後、ふつうに使われているか、新鮮なままでいるか、どちらかだ。」第一の例はお前固有のもだ。第二の例れいは見栄をはるのに役に立つ。聞きながら、時間がたつにつれてどのような法則、いろいろのケース、現象などの語いの意味が分かってくる。なぜかと言うと科学者や師匠に本とか、研究とか、かれらに記憶をたどらせて、語いの意味を聞く方法はまったくでたらめだし、新しい考えを生み出す危険がある。それにめんどろで疲れる。その法則と方式を身に付けた日にはお客さんがたくさんいて、頭のよい仕立て屋のように節約して使うだろう。ある有名な詩人がこう言っている「布があればあるほど切るのを惜しむので端切れの山がへる。」この現象は大物については科学的ではない。

—まったく難しい職業です…

—まだまだあるぞ…

—じゃ、続けてください。

—宣伝による利益についてまだ話していない。宣伝は魅力的でエレガントな女と同じだ。小さなおみやげやコンペイトウや匂い袋などと言った小さなもので親愛の情を示しながらリクエストするも

ので、ずうずうしさと野心で得るものではない。例えばドン・キホーテは女をリクエストするのに大変で英雄的な活動をするが、それはただこの有名な狂人だけがいつもすることだ。本当の大物はそうではない。「綿羊の飼育学術書」など書かないで、そのかわりに羊一頭買って夕食にそれを友達にふるまうと、そのニュースはみんなに知れわたる。一つのニュースが次のニュースを呼び、それが5倍、10倍、20倍になってお前の名を世間に広める。

まず、外の客や偉いやつや賞表を受けるやつらを迎える委員会と特別委員会に参加するべきだ。ダンスクラブでも、狩猟愛好会でも、架空の会でも、何でもいいから協会やクラブの委員になることだ。なんでも出来事は小さなことでもいいからお前の名を知られるために役立つようなら表に出すべきだ。説明しよう。車から降りるとき、足をふみはずして転げ落ちたとしよう。びっくりするだけで怪我はしなくても四方にその噂を流すと、そのことじたいは何でもなかったかもしれないがお前の名前を思い出させることができる。分かったか。

—はい、分かりました。

—これは毎日の簡単で、安くて、いつも続けていける宣伝だ。しかし、ほかの方法もある。芸術の理論はどうであれ、家族の愛と友情と人気はその人の善人的な画像を描きあげる。このような栄誉的になるにはじゃまはない。特に友達の洞察力がお前にたいして嫌悪感を催さなければだ。同じく、胸像や写真を公共の場に友達が置くことを受け入れるのは原則で、それを断るのは失礼になる。写真があるとお前の名前と顔があわせられる。例えば、お前が先日美容院協会の創立パーティーで行った講演の内容を読んだとしよう。その人は「発展の促進と労働の汗は貧困の餓鬼を退治する」と言う、まじめな話の講演をした人の顔をそこに見つけることができる。どこかの委員会が写真を家に持ってきたら、とてもありがたいと言うお礼を長々と叩いて、水を一杯やるがよい。昔からの習慣だし、適当で、正直な態度だ。そのあとで親友と親戚と、できたら、二、三名の有名人を食事に招きなさい。まだある。その日が喜ばしい日か晴れの日なら、新聞記者を食事の席に招かないとすることはない。とにかく、新聞記者が出席できない場合は自分でパーティーの記事を書いて手伝ってあげなさい。もし遠慮心があって、自分で自分のことを褒める文章を書くのが嫌だったら、友達か親戚に記事を書いてもらうがよい。

—お父さんの教えてくれることはとても難しいです。

—私もそう思っている。難しくて、時間をたくさん食って、何年も、忍耐と努力が必要だ。約束の地に辿りついた者は幸せだ。辿りつけなかった者は闇に飲み込まれてしまう。しかし、成功するやつは！信じろ、お前はぜったい成功する！昔から「神聖な笛の音に釣られ、エリコの町の城壁を回ると、城壁はくずれ落ちる。」というのではないか。その時ようやく大物として認められたことになるのだ。その日からお前はぜったいなければならない飾り物になる時が始まるのだ。その日から、何らかの機会や、委員会や、クラブなど探す必要はなくなる。むこうから味もそっけもない名詞的な話を持ってきて、お前は形容詞の役を務めるのだ。花の香り、空の青さ、しめんの親代わり、話題の中心人物だ。それがもっとも重要なのだ。なぜなら形容詞は言語の魂で、理想の部分で抽象的なものだからだ。名詞は現実そのものだ。語いの自然主義と言える。

—これらはみんなただ人生に足りないところを補うものなんですか。

—そうだ。これがぜんぶひっくるめて一番いい方法だ。

—政治も？

—政治もだ。大事なものは主な義務と規則を破らないことだ。自由党か保守党、共和党か公民党、どんな政党でもよい。ただ一つだけに思いを寄せてはならない。誰がどの党か分かればよい。

—政治家になったら、高座に立ってもいいですか。

—よろしいし、それはお前の義務でもある。聴衆の注意を引く一つの方法だ。講演の内容は選べる。一些細な話か抽象的な政治の話どちらでもよいが、抽象的な話のほうがいい。ささいな話は、実を言うと、できた大物にはちょうど良いつまらない話だが、できたら抽象的な話のほうが簡単で魅力的だからいい。—例えばお前がなぜ第七歩兵隊がウルグアイアーナからカングスへ移動したか知りたいとしよう。すると、ただ陸軍大臣だけが具体的に十分その理由を説明するだけだ。抽象的な話はちがう。抽象的な政治についての講演は自然に政治家や観衆を惹きつける。また考えさせたり答えをみつけなくても済む。このタイプ人間の知識についてはぜんぶ分かっている、方式ができていて、かたち付けられていて、型にはまって填まっている。記憶をたどるだけでいい。兎も角、一般的な知識をぜったいに超えないことだ。

—できるだけ努力します。何か考えたほうがいいことは？

—ない。それよりもお前の思考力は低いと言う噂を流せ。

—哲学はだめですか？

—そうだな…書物や話には少し出してもいい。実際にはだめだ。例えば「歴史の哲学」という表現は頻繁に使うがよろしい。でももう分かっている結果以外のことを言うのは禁じる。考え事や新説臭いものならば遠ざかれ。

—笑いからも？

—笑いからとは？

—とてもまじめになるとか…

—時と場合による。お前は遊び人の性格が強いが、それを押し殺したり無くすことはない。時々遊んだり、笑ったりしてもいい。大物は憂鬱でなければならないということはない。重要な人物も楽しい時があってもいい。しかし—この点が微妙だ。

—はい。

—しかし、墮落したギリシャ人が発明し、サモサのルキアノスを通して、ジョナサン・スウィフトとヴォルテールに伝わった謎っぽい、疑い深くて、失望したやつがニヤニヤしながら言う皮肉論は言うてはならない。いや。それより冗談を言え、ズボン吊りが笑いではち切れたり、血が踊ったり、手を打ったりするような、人に直接に歯にものを着せず、猫かぶりもせず、正直にデブとか、太っちゃとか冗談を言うがいい。おや、何だろう？

—もう十二時ですよ。

—そうか。もう十二時か。これで坊主、お前の二十二歳が始まる。これで立派な大人だ。もう遅い、寝よう。息子よ、今日言ったことをよくはんすうしなさい。今夜の話はニッコロ・マキャヴェッリの君主論をほどよく省略したものだ。さあ、寝よう。